

あたたかい支援の手を冬の釜ヶ崎へ——一九八〇年

釜ヶ崎の越冬に六〇〇万円のカンパを!!

釜ヶ崎からの呼びかけ

釜ヶ崎の小さな働きを全国の各地で支え、はげまして下さることを感謝します。

第一〇回の越冬闘争支援後も、わたしたちは、「釜ヶ崎の病氣」をテーマに今日まで活動してきました。ここにまた、冬を前にして現場で働いて来た者からの呼びかけをいたします。

昨年のみなさんの越冬へのカンパは、七、〇六八、八九二円でした。有効に活用させていただきます。ありがとうございます。

十六年目の感謝

十六年前、釜ヶ崎で働いていた教会の関係者は二人しかいませんでした。二人とも属している教会から「迫害」されたといっても言過ぎではないと思います。その二人の一人がやめて、別な所へ行ってしまった。もう一人は一人で頑張りました。何年も教会の助けなしに一人で頑張りました。

今年、協友会は十周年記念日を祝っているばかりでなくて、越冬の働きも六回目を迎えることができました。協友会の力だけでこれほどの大きな働きは決してできません。

皆様のたすけでここまでできました。十六年前のただ一人の力と今年の皆様の合わせた力とではどれほどちがうでしょうか。答えは簡単です。

これからも一人でも頑張りましょう。十六年にかかっても二〇年にかかってもいつの日か良いことが起ると信じます。

皆様にただ一言、心から感謝をもうし上げます。

西成ベビーセンター
E・ストローム

釜ヶ崎の結核

結核は人類とともに発生し、数千年の歴史をもち、旧約聖書のレビ記26:16、申命記28:22の二ヶ所にも記されるなど古い病気である。

今日では、結核対策が強力になされ、日本では死亡率第一位の座を他の病気にゆずりわたしたが「釜ヶ崎」では、いぜんとして、結核による苦しみの遺産が重くのしかかっています。日本キリスト教海外医療協力会から派遣され、ネパールで結核の撲滅のために闘った岩村忍医師が、釜ヶ崎に来た折に「ここは、日本のネパールである。私がネパールに行く前に釜ヶ崎を知っていたら、自分は、ここに来ただろう」といった言葉を忘れることは出来ない。

その結核の町釜ヶ崎に住んで十二年目に、私も発病し、入院、静養の身となった。幸いに、私は、保険もあり、多くの人々の折りと、経済的な支援によって闘病の生活を送ることをゆるがされている。しかし、釜ヶ崎の住人としては、苦しみにあえいでいる他の労働者諸君に相すまぬことだと思っている。病いから解放されて、再び釜ヶ崎で働く日も近いことであるが、私の働きの大切な一つに「釜ヶ崎における労働者の結核からの解放」という項目をつけたいと念じている。「釜ヶ崎の結核」という原点を直視しながら私たちは、

アジアの結核や貧しさの問題と連帯したいと思う。この視点を欠いて、ネパール、インドなどの問題に、とびつくことは、信仰的には不誠実であり、問題の本質をぼやかしてしまふことになってしまう。

日本キリスト教団いこいの家
金井愛明

結核ケースワーカー

としての一年間

皆さまのあたたかい援助に支えられ、無事一年すぎました。心からお礼申し上げます。はじめは慣れることで精いっぱいでしたが、今では労働者と直接関わり、結核の予防、治療などのお手伝いをさせてもらっています。

午前中は、結核予防法三十五条の人（排菌患者で即入院を要する人）百名に対して、大阪社会医療センターで調査をさせてもらいました。一人一人とゆっくりと話ししその人のもっている問題点の多いことに気付かされました。単に結核だけ見て、薬を与えるだけでは結核は治らないことがわかりました。

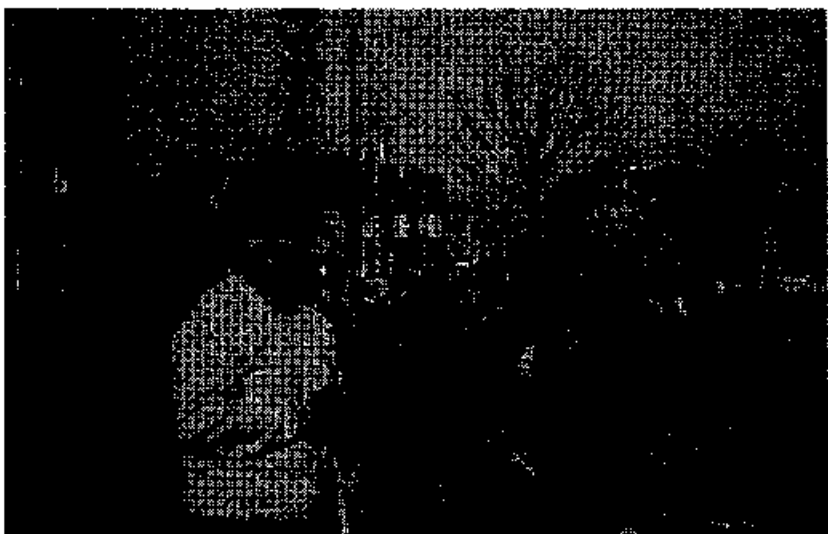
例えば、「もし元気がなかったから、誰が喜んでくれるんや」「じつとがまんして、酒のまかないで結核を治すより、このまま酒を飲んで道路で死んだ方が幸せや」。また「結核を治したから、本当に働らせるんか心配や。」などの声が出ました。

その声を聞き、患者のもつ精神的な面または社会的な面そしてアルコールとの関係など、むずかしい面がいっぱい出てまいりました。午後からは、労働者のたまり場である三角公園や路上で、労働者と話ししたり、病気の相談にのっています。毎日色々な人と出会いこちらが、教えてもらうことがたびたびです。また一人一人大きな可能性をもっておられることに気付きます。

結核については、入院しても治療期間が長く、途中でもう働けると思い、自己退院する人もかなりあります。また軽快退院しても毎日、日雇のきびしい労働では、一年としないうちに再発してしまいます。そのような中で如何にすればよいかといつも考えさせられます。今のところは、一人でよいから徹底的に関わり、その人をモデルケースとし、その人のまわりから、もう一人の人が起され、またその人のまわりから一人の人が起され、またその手をとり合って行けるように、またそのお手伝いが、できればと願いつつこれからも頑張りたいと思います。

どうぞさらに覚えて下さい。

入佐明美



三角公園で医療相談中の結核ケースワーカーの入佐明美さん



第一回患者交流会に参加した人たち
於 喜望の家（一九八〇・五）

結核患者交流会

釜ヶ崎の多くの入院患者の問題の一つは、退院後、自立するまでどうするかと言うことです。長い開病生活のため体力的に就労は無理。むしろ入院している間は、治療と生活の保障があるが病院を出ても入院のくり返しの人生を送る人も少なくないのです。こう言った問題を少しでもなくするため退院を間近に控えている人々を招き、「入院生活の問題」、また、「これからの生活に備えての心がまえ」、「福祉から保護を受ける方法や手続」等、確かな方向づけがあることに一人一人が希望を持って自分を大切にできるように、お互いが聞き手になったり支えになったり、出来るだけ一人でも建設的な人生の歩みに向う意図のもとに、二ヶ月に一回、共に集い、楽しいレクリエーションや昼食を交えた患者交流会を持っています。

愛徳姉妹会
シスター岡風呂

医療相談から

医療相談は、労働者との出会いの、いわば最前線である。

協友会の各窓口には、昼夜を問わず、毎日、さまざまな問題をかかえた労働者が相談に訪れる。常連は別として、労働者はギリギリの線まで我慢して、もうどうにもならないところで、恐るおそる窓口に立つのである。

そこでは、現実のありのままの姿を受けとめるだけの感受性が要求される。一人ひとりが必要な度（ニーズ）を明確に把握し、適切な措置を講じなければならぬ。資源の紹介、診察依頼券の発行、救急車の手配、そして何よりも回復への治療体系の組立てを助言する。しかし、たとえば、希望の家には毎日十人以上の相談者があるが、キツチリした関係を確立できるのは、その一割にも満たないのが現実である。窓口のスタッフの確保、ニーズにあったメニューの準備、各資源との関係確立が緊急の課題となっている。

—福音ルーテル教会—
希望の家
重野 信之

キリスト教医療連絡会

越冬が終わった五月はじめ、わたしたちは越冬のテーマ「釜ヶ崎の病氣」を年間の活動テーマとすることにして、「キリスト教医療連絡会」を発足させました。目的は、結核ケースワーカーとして働く入佐明美さんを支えること、また、越冬期間中に出来た医療相談、十六以上もある病院訪問が出来ただけ、有機的にすすめるためでした。その活動の中から「患者交流会」を五、七、九月に催すことができました。また、釜ヶ崎地域問題研究会の協力で「医療ニュース」を出し、入院中の患者同志が作品上で交流したり、開病生活へのはげましの言葉を送ることができました。まだ、はじまったばかりですが、釜ヶ崎で一人の結核患者が治り、自立して生活することが、釜ヶ崎の変わる一歩であることを信じ、これからも活動を続けたいと思います。そして今年の越冬期間中も特に「釜ヶ崎の医療」をテーマに、みなさんの支援のもと、労働者とともに一歩一歩進みたいと願っています。

関西労働者伝道委員会
小柳 伸 顯

労働者の家の実現へ

三年前から、越冬の夜間パトロール中、公園や橋の下でおかん（野宿）している労働者を見るときいつも考えました。

「体の病氣や衰弱のためもう働くことできないで、どこにも行く所のない労働者のために何かができるのか、生活できる場所がないか」と。こういう労働者の家をつくるために、二年前から越冬の募金からも毎年一〇〇万円ずつお金をためてきました。この秋、やっと適当な家を見つけました。来年の春にあく予定です。

今年の越冬に間に合いませんが、来年は青カン者にとつて、希望と光の年になりますように、今年も皆様のご協力をお願いいたします。

聖フランシスコ会ふるさとの家
S・ハイブリッヒ

一九八〇年度活動予定

- 一、行政への働きかけ
- 一、医療活動
 - イ、結核ケースワーカーの活動
 - ロ、医療相談（入院・生活その他）
 - ハ、病院訪問（年間を通じて）
- 一、炊き出しへの支援

一九八〇年十一月

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

代表 小柳 伸 顯

（釜ヶ崎協友会・関西キリスト教都市産業問題協議会）

大阪市西成区萩ノ茶屋二一八—十八

希望の家内

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

電話 大阪（〇六）六四七—三九四六

郵便振替口座 大阪五〇三八五

支援との先
越冬ネットワーク
越連力送



労働者に衣料を安く提供する古精バザー
於 希望の家前



第十回越冬闘争炊き出し風景
於 萩ノ茶屋中公園（一九八〇・二）



第九回夏まつり風景 すもうをとる労働者
於 三角公園（一九八〇・八）